ゼミの談話の参照·言及表現における引用形式の機能

——「と」と「って」を使う表現を中心に

S12（漢字表記）

要旨

「と」と「って」は談話の中でよく使われる引用形式である。本稿は、大学院のゼミの談話における「と」と「って」を使う引用と参照表現の使い頻度と接続の内容をそれぞれ比較した。結果として、「と」が「って」より丁寧であることが分かった。また、「って」は質疑の場合で使う場合が多い、「と」は説明の場合多く使われることが明らかになった。

キーワード：参照表現　引用表現　引用形式

はじめに

講義や談話をするとき、自分の意思を相手にはっきり伝えるために、あるいは他人の発言を確認するため、または相手を持ち資料の特定なところに注目させるため、発話者はよく参照·言及の表現方式を利用する。この表現の構造として、《引用内容+引用形式+述部動詞》三つの構成部分を備えているのは常である（渡辺 2010:169)。そして、引用形式として、よく使われているのは「と」と「って」だと思われる。

この二種は引用形式の機能が近いと思われるが、実際の場合では、「と」と「って」のいずれがかを用いたことによって、話のニュアンスが違うことがよく感じられる。日本語の中の微妙な差異を区別するのは日本語学習者にとってはとても難しいことだと考えられる。この二種の引用形式の機能の違いを明らかにすれば、日本語の勉強に役立つと考えられる。

本稿では、大学院のゼミの談話に出てくる「と」と「って」を使う引用と参照表現を比較する。その接続の内容をそれぞれ比較し、「と」と「って」という二つの表現形式がどんな違いがあるのかを明らかにするのがこの論文の目的である。

１、先行研究と本研究の位置づけ

参照、言及表現における引用形式については，これまでいくかの観点から先行研究がなされてきている。

浜辺（2010）は講義という場面での、講義者がどのような表現を用いて教材、教具を受講者に注目させ、どのようにそれらの内容を伝えているのかについて詳しく記録し、分析した。結論の一つとして、引用内容によって、発話者が使う引用形式が違っていると述べ

た。三枝（1997）佐藤（2011）野村（1999）は話し言葉の中の「って」の使い方を分析し、その機能をまとめた。そして石黒（2015）は大学講義のなか、「と」で終わる文の頻度を調査し、その機能を分析、考察した。

しかし、先行研究は「って」と「と」を分けて分析したものが多く、しかも研究の対象として講義の談話を利用する場合が多い。だが、講義は講義者一方的の発話に対し、ゼミは多人数の談話であるから、談話の中に出てくる引用形式もよりバリエーションに富むと考えられる。ということで、私は大学院のゼミの談話を対象に、「と」と「って」を使う引用と参照表現の比較研究を行うことにしたい。

２、研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話の二つを文字化したものである。

一つは、『(研究発表タイトル)』というタイトルをつけ、絵本が外国語の学習の中どれほど役に立つのかを討論した約 42 分 36 秒の談話である。発表者を含め、参加者は 8 名で、それぞれ発表者が配ったレジュメを参照しながら、コメントした。、

もう一つは、『(研究発表タイトル)』というテーマで、発表者を含めた 8 人の談話である。談話の長さは 41 分 53 秒だ。前の資料と同じ、談話の参加者はレジュメを参照していながら談話を続けていた。

ゼミのメンバーの情報に関して、二人の発表者ともゼミの中で一番年下のメンバーに対し、質疑者は先生、または OB・OG 格を持つ先輩である。

そして、その文字化データから、「と」と「って」を使う引用、参照表現を抽出し、そこから、この二種の引用形式は談話の中でどういう形で出てきたのか、それぞれ果たした役割がなにかということを記録し、比較分析を行った。

３、分析の結果

3.1 使用頻度

表１　ゼミ談話における「と」と「って」の使用頻度

	談話 A	談話 B	合計
と	38	17	55
って	35	10	45
合計	73	27	100

表 1 が示したように、84 分程度の談話の中で、レジュメ、または他人の発言の内容を参

照、引用する場合、「と」と「って」を使う表現が 100 回出てきた。その中、「と」は談話 A で 38 回、談話 B で 17 回、合計 55 回使われ、「って」は談話 A で 35 回、談話 B で 10 回、合計 45 回使われた。談話 A における引用・参照表現は談話 B よりきわめて多いことがみられる。

これについては、二つのゼミ談話の具体的な情報を入れた表 2 と表 3 を参照しながら説明する。

表 2　発表者の情報統計

	と	って	合計
発表者 A	33	24	57
発表者 B	11	1	12
合計	44	25	69

表 3　質疑者の情報統計

		と	って	合計
質疑者 A	A１	2	6	8
	A２	2	0	2
	先生	1	6	7
合計		5	12	17
質疑者 B	B1	2	0	2
	B2	4	1	5
	B3	0	2	2
	B4	0	3	3
	先生	0	2	2
合計		6	8	14

質疑者と発表者の統計データを比較すると、談話 A、B における「と」と「って」の利用頻度の差異の原因は発表者 A、B にあるということが考えられる。談話の中で、発表者 A が「と」と「って」を使う参照表現を 57 回も使ったことに対し、発表者 B が 12 回しか使わなかった。これは個人の習慣、または日本語能力に関係あると考えられるので、詳しい分析はここで省くことにする。だが、全体から見れば、発表者が「と」を使う頻度が「って」を使う頻度より高いことが明らかになる。その一方、質疑者が「って」を使う場合が多い傾向が見られる。

二人の発表者ともゼミの中で一番年下のメンバーであるため、年上（目上）の人に対し、「と」を使う言い方が「って」を使うより丁寧だということが考えられる。また、この違いが質疑者と発表者それぞれの談話内容と関係あるのも考えられる。具体的な分析は以下

の部分で論じてみたいと思う。

3.2　前後文脈内容による機能分析

ゼミの談話の中で、レジュメの内容、あるいは先行発話の内容を参照･言及の対象とする場合、引用形式の機能が異なることが考えられる。この二つの場合を分けた上、また、前後文脈の内容により、「と」と「って」がそれぞれ果たした機能の違いにより、ここでは、位置提示、質疑、説明、補充解釈、四つの類別に分けて、分析を行う。

以上の分け方により、参照･言及の表現の中で、「って」と「と」が各場合で出てくる頻度を記録した結果は表 4、表 5 で示す。

表 4　レジュメの内容を引用する場合

	位置提示	質疑	説明	補充解釈	合計
と	５	３	２８	２	３８
って	０	３	７	１	１１
合計	５	６	３５	３	４９

表 5　先行発話の内容を参照する場合

	位置提示	質疑	説明	補充解釈	合計
と	０	２	１３	８	２３
って	０	１０	１４	４	２８
合計	０	１２	２７	１２	５１

「位置提示」、「質疑」、「説明」、「補充解釈」という分類の基準は以下の例で説明する。

3.2.1、レジュメの内容を引用する場合

(1) それが、これまでの研究のこの部分（レジュメを指さす）！だと思うんです。

ここでの参照表現は単に聞き手を持ち資料の特定なところを注目させる役割を果たし、引用の内容についてどんな意見持っているのは言及していなかった。つまり、「位置提示」の機能を果たした。

(2) C：あの、因子分析の、ちょっと私…（中略）えーと 15 番の（発表者:そうですね）「冒頭のところが思いつかない」って言うところに入っちゃってるって言うのが、エーと、解釈上は問題があるかということだったんですけど…

「って」を使う参照表現のあと、発話者が参照の内容について理解できなかったことを

述べた、ここでの参照表現が「質疑」の機能を果たした。

3.2.2、先行発話の内容を参照する場合

(1)、質問者 A:そもそも、能力試験のレベルとかが基準になっているのが、その絵本の魅力が、能力試験の語彙とか文法とかと違うところにあるのだとしたら、そこに当てはめてしまったら、

発表者：あまり意味がない。

質問者 A：意味がないとは思わないんですけども、絵本じゃない文章との違いが。同じ分析でいいことになってしまう。

質問者 A のコメントに対し、発表者は「あまり意味がない」と自分の理解を述べた。そして質問者 A が「意味がない」を重複し、その後また自分の考えを説明した。ここでの参照表現は「説明」の機能を果たしたとはいえよう。

(2)、っていうのは、例えば…

ここでは参照内容を省いたが、文脈によると、これは自分の先行発言の内容をさらに補充することが分かった。ということで、ここの参照表現を「補充解釈」と分類した。

統計データ、または例を参照してみると、「説明」、または「質疑」の部分における違いがはっきりしていることが見られる。引用内容について質疑の場合、「って」を使う頻度がより高い、引用内容をだいぶ賛成し、また自分の理解を入れたい場合、「と」を使う頻度がより高いということが分かった。

おわりに

「と」と「って」は談話の中でよく使われる引用形式として、果たしている機能が非常に近いと思われるが、両者の間には微妙な差異があるのも考えられる。本稿は、まずは大学院のゼミの談話に出てくる「と」と「って」を使う引用と参照表現の使い頻度を比較して、発表者と質疑者の発話における違いを分析した。また、接続の内容をそれぞれ比較してから、両者の違いを分析した。

手に入れた資料が少なかったため、本稿には考察不足のところも色々あると思う。そして、語学についての専門知識も足りないので、この二つの引用形式の比較がまだ表面的なものに止まったことを残念に思っている。今後はこの部分について、もっと深くて、詳しく掘り起こしたいと思う。

参考文献

石黒圭（2015)「大学講義の文末表現の機能―引用助『と』で終わる文を例に」『一橋大学国際教育センター紀要』 6 pp.17-29
野村真一（1999)「『S ッテ』文の分析 ： 引用標識『ッテ』を用いたストラテジー」 『金沢大学語学・文学研究』 27 pp.44-34
三枝令子(1997)「『って』の体系」『言語文化』34、pp.21-38
佐藤雄一(2011) 「引用形式『って』における主題提示用法」『共立国際研究 ： 共立女子大学国際学部紀要 = The Kyoritsu journal of international studies 』28 pp.1-20
渡辺文生（2010)「第９章　講義の談話の引用と参照」佐久間まゆみ編（2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版　pp.169-186